



長谷寺かわら版

# 百日紅

85号

2013 (平成 25) 年  
1月1日

## 四国遍路つれづれ

(後編)

一 昨年の春から始めた四国遍路に関わって、感じたことや調べてみたことなどをだらだらと綴っています。

綴っているのは、四国霊場も遍路も知らなかった人間が見た、お四国と遍路の姿に過ぎませんから、多くの檀家さんにとっては周知のことばかりが書かれているのかもしれない。

前号では、長谷寺の過去帳に記録されている遍路の不自然な数の多さに着目し、その謎解きの糸口として、四国霊場に特有な「接待」という慣行について少し考えてみました。

そもそも「接待」は、い



ま行なわれている多くの接待と違い、まず遍路たちによる托鉢という行動があり、それに応えることによって初めて成立するもので、接待する側とされる側の双方にとつての修行だった、というあたりまで話しました。

### ☆伝説の中の開創

ところでは、どこかの札所にも、写真のような看板が立っています。

空海は42歳の厄年のとき、

厄災を除くため、四国霊場を開創したと伝えられているのだそうです。これが弘仁6年(815年)のことで、だから来年平成26年(2014年)が四国霊場開創1200年。

ぼくらの遍路行は昨秋から伊予に入っています。来年には結願の予定ですから、まさに記念すべき年の結願になります。霊場でどんな記念行事が行なわれるのか、いまから楽しみなことです。

しかし、空海が四国霊場を開創したということ、そしてそれが1200年前のことというのは、残念ながらどちらにもあくまで伝説の中での話に過ぎません。

ただ、空海が阿波の「太滝岳」や土佐の「室戸崎」

うです。けれどたしかなのはそこまで。

前号で「四国が平安時代頃から僧侶たちの修行の場であった」と書きましたが、彼らの修行の場は四国の地に限ったことではありませんでした。

四国は、仏教に限らない、多くの修行者たちにとって修行の地のひとつに過ぎなかったわけで、同じように、空海も四国で修行した多くの修行者たちのひとりに過ぎなかつたと考えるのが、歴史の実相に近いでしょう。

ですから「太滝岳」や「室戸崎」も、そういう古来からの修行の地であり、ここで修行をしたのは空海が初めてということでもなかつたはずです。

しかし時代が下ると、次第に四国は、やはり辺境の地ということもあってか、僧侶にとって特別な修行の場という性格を帯びてきます。またとくに真言僧たち

にとつては、祖師空海ゆかりの地という意味もあつたのでしよう、空海の遺徳を慕って四国を歩く僧侶が現われはじめます。

空海が四国で生まれ修行をしたという背景が、いまも高野山で生き、人々を救うために祈りの暮らしを続けているという弘法大師信仰や、黄門さんよろしく全国を行脚し、多くの奇跡を起したという大師伝説とあいまって、修行の地四国と空海を結び付け、霊場も空海が開創したものだ、はてはいまも「お四国」を歩いていると信じられるに至つたわけでしょう。

昨今開創される新しい霊場と違って、歴史の古い霊場は、長い時間と、名もな

い人々の力で、次第に形作られていったものです。

### ☆88という数

ところで、霊場の88という、いかにも縁起のいい数の重なりは、観音菩薩の聖

など、いま霊場と呼ばれる地で修行したというの、かなことの上

数である33の寺を配した西国霊場や、熊野参詣途上にある、「九十九王子」の存在が背景にあったのではないかと いわれています。

また最近では、例えば「阿波10か所巡り」のように、地域ごと、国ごとに、古くから巡礼されていたいくつかの寺院群を、88の霊場に編成した、仕掛け人めいた存在があったのではないかと、いとも魅力的な説もあります。

ともあれ、決してはじめから88の霊場があったわけではなく、その成立は空海の生きた平安時代どころか、江戸時代初期にまで下るといわれています。

僧侶たちの修行の地だった四国が、霊場として整備され、庶民も遍路をするようになったとされる江戸時代には、遍路屋（宿泊所）や標石が作られ、参拝用の指南書（ガイドブック）や絵図も作られます。

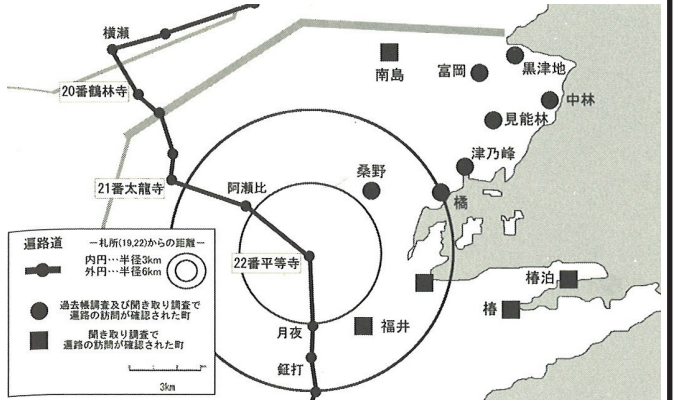
経済が安定し、交通環境も整備され、庶民の旅も可能になったという社会的、歴史的条件も背景にありました。

前号で紹介した、遍路への接待という習慣もまた、弘法大師信仰にも後押しされて、次第に定着していききました。

### ☆遍路道をはずれて

遍路たちは、ときに遍路道をはずれ、近隣の村々にまで托鉢の足を延ばしたことでしょう。とくに飢饉の時は、労を厭わず、さらに遠方まで足を運んだかも知れません。

下の図は、県南の阿南市周辺の地図です。円の中心が22番の平等寺で、北から南に遍路道が通じています。



星野英紀・浅川泰弘著『四国遍路』より

こうして遍路たちは、遍路空間を、札所と遍路道のさらに外へと押し広げていきました。いわば四国中が遍路空間になったわけです。前号の冒頭に述べた四国中どこにでも遍路が行われる時代は、限定的にしる、たしかにあったわけでは

長谷寺の過去帳に残る遍路の多さの背景には、こういう遍路たちの動きがあったといえそうです。

### ☆生きるための遍路

そういう遍路たちの中に

は、修行というより、生きるためだけに四国に来た人も、きつと少なくなかったでしょう。

実際、江戸末期の天保年間（1830〜43年）、日本を大飢饉が襲います。このとき、四国霊場よりはるかに古い歴史がある西国観音霊場では巡礼者が激減したのに対し、四国は逆に増加したらしいです。

どうやら、食い詰めたら四国遍路に行けば何とかなんと信じられていたようなふしもあります。

ですから、遍路を続けるための托鉢でなく、托鉢をするために、言い換えるなら、生きていくためにやむなく遍路になる人も少なからずいました。

ところでこういう、托鉢のためにやむなく遍路になった人々、「お遍路さん」とは少し異質の人々を、四国の人たちは、「ヘンド」と、いささかの蔑みのニュア

スを含む言葉で呼んだらしいです。

寺で暮らすと、しばしば「物乞い」がやって来ます。粗末な身なりで、金品を求めます。なにしろ寺ですから、追い返すことはありませんが、現金でなく、なるべくお下がりの菓子や果物を渡すようにしています。

僧侶たちの集まる席でこういう話題が出ると、この「ヘンド」という言葉が出ます。どうやらこの言葉は、いまも生きています。

ただ生きるためだけに四国にやってきた人々は、遍路のスタイルはしていても、どちらかといえば物乞いに近い存在だったでしょう。遍路ではないが単なる「乞食」とも言いにくい。そういう微妙な感覚が「へんろ」という言葉を濁らせた呼び名を与えたのでしょうか。

しかしそういう存在でも、どうかそういう存在だからこそ、ただ追い返すとい

うわけにもいかないというところがあつたようで、ヘンドと濁って呼んでも、やはり遍路として扱い、それなりの接待はしたようです。

この背景にも、弘法大師の存在がありそうです。

### ☆衛門三郎伝説

四国遍路の濫觴を紹介するときに必ず語られるのが、衛門三郎の伝説です。

お馴染みの話なのでかなり端折つてですが、紹介しておきます。

裕福だが強欲な伊予の衛門三郎の屋敷に、ある時、みすぼらしい僧侶が托鉢にやって来ます。この僧侶にひどいあしらいをした衛門三郎は、八人の子どもたちを次々と病で亡くしてしまいます。

その僧侶が弘法大師だったことを知った衛門三郎は、大師を追って四国を巡る旅に出ます。21度目の巡礼でようやく大師に会えま

すが、あえなく死んでしまいます。しかし、望み通り名家に生まれ変わることができたという物語。四国遍路はこの衛門三郎の旅から始まったとされています。

どの国にもきつとある、来訪する身をやつした聖人へのあしらいで、不幸が定まるといふ伝説と同じパターンが、ここにもあります。ここでは大師は、物乞いに身をやつして人々を試す存在です。

卑しいヘンドに見えても、もしかしたら彼は弘法大師かも知れないわけです。決して粗雑な扱いはできません。

☆遍路排除の歴史

しかし、このような遍路の増加、とくに物乞いの増加、行政も座視しているわけにはいきません。

そういう輩が国に入り込まないように関所で追い返したり、接待や宿貸しを禁

じたりという、様々な取締りが行なわれました。

幕末の土佐では、一切の遍路の入国を禁じたこともあります。

こういふ遍路の排除は、なんと明治維新後も続き、行政だけでなくマスコミもこれに加わりました。遍路は非文明的な行為であり、接待や托鉢は全面禁止すべしと主張した社説が、徳島の新聞に掲載されたこともあるようです。

少なくとも四国の地が、いつの時代も遍路たちを温かく迎えたというわけではありませんでした。

☆遍路の死

そういう遍路たちの中には、病に倒れる者もいたでしょう。そういう場合は、村の経費で看病をし、また出身地へ連絡をとるなどし

ました。

もし不幸にも亡くなってしまうたら、村役人が検分し、役所に届け、僧侶を招いて懇ろに弔いをし、墓に納めました。遍路たちを埋葬した墓、いわゆる遍路墓は、いまも四国の各地に残っています。

長谷寺の過去帳の遍路たちも、こうした手続きを経て初めて、引導を渡され、過去帳に名前を残したわけです。

当時の寺は、そういう定められた一連の手続きの中に位置づけられていたわけで、決して仏教の慈悲の教えだけで遍路たちを弔ったわけではありません。

しかも、すべての遍路がそういう丁寧な扱いをされたわけではありませんでした。

遍路に限らず、江戸時代に旅に出る場合、寺や村役人などが、往来手形と呼ばれる書類を発行し、旅人は



これを常に身に付けていました。当時は国内を旅行するにもパスポートが必要だったわけです。

この手形には、「この者はうちの寺の檀家の何某である」という人物証明や、旅

の目的などが記され、これがないと関所などの通行が

できませんでした。また遍路

路のもつ手形には、「万一病

死したときはその地の作法

で葬ってほしい」といった類の記載さえありました。

長谷寺の過去帳に記された60人のうちの9割は、生

国が記載されています。身

元が分かる彼らは、こういう手形を持った遍路たちと

考えられます。そういう遍路は、懇ろに葬ってもらえ

たわけです。

しかし中には、往来手形のようなきちんとした書類を持っていない遍路も少なからずいたようです。彼らが死んだときは、葬式もせずに埋められたようです。

うちの過去帳の60人の遍路の背後には、葬式もしてもらえず、まして戒名も付けてもらえなかった、さらに多くの遍路たちが、きつといたはずで

### ☆遍路からの便り

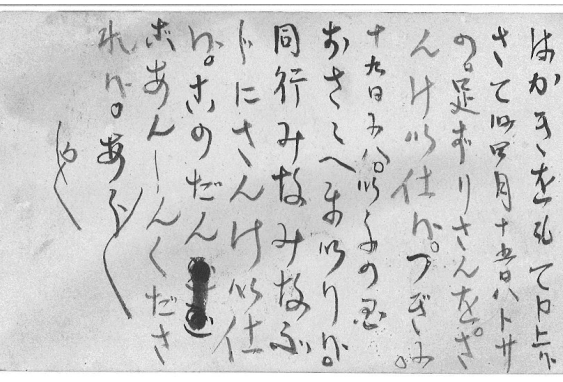
長谷寺から見える四国霊

場と遍路たちの眺めを、気の向くままにスケッチして

みました。死んでも過去帳にさえ残らない遍路たちの姿も垣間見えたところで、

最後に遍路からの便りを紹介して拙い文を閉じます。

数年前、ある家の仏壇を



整理したとき、引き出しの中から古びた葉書が出てきました。便りを書いたのは、22歳のロクという名の娘さん。明治25年（1892年）

年のものですから、今から120

年前のもので

27番札所土佐の神峯寺のふもとに泊まったとの4月

30日の消印のあるものを皮切りに、5月18日に箸蔵で

お通夜をして、22日には金比羅に参る予定。27か28日

頃には帰ります、という便りまで、全部で5通。

上の写真は二通め。日付は5月15日。

「はかきをもて申上候」

さて旧四月十五日ハトサの足ずりさんをさんけい仕候

つぎに十九日はいよいよ国おさへまいり候 同行みななぶじにさんけい仕候

このだんごあんしんくだされ候 あらあらかしこ

右に紹介したロクさんは22歳ですから、娘遍路と考えるにはいささか遅いかも知れませんが、後年、彼女の娘のミヤコさんも同じ22歳で遍路に出ており、この年齢に何らかの意味があったのかもしれない。

男性にも「若者遍路」とも呼ぶべき通過儀礼がありました。むろん底流に大信仰があったにしろ、信仰や仏教の修行のみでない遍路は、ヘンドたちに限らず、少なからずいたわけです。

いまは、遍路装束を着けないどころか、ろくに読経もせずに宝印だけを集める、単なるスタンプ・ラリーに過ぎないような遍路も少なくないという、札所の嘆きが耳に入ります。

かたや昨今復活した歩き遍路は、その多くが「自分探し」や「癒し」がその目的といわれ、お大師さんの影は薄いです。

いずれにしろ、遍路たち

〒772-0004 鳴門市撫養町木津 1037-1  
電話 088-686-2450  
ファクス 088-686-2130  
E-Mail cho\_kuma@mwb.biglobe.ne.jp  
URL http://www.chokokuji.jp/

長谷寺 新編 雑信

の目的は、昨今ひどく多様化しているようすし、霊場自体も、社会の変化とともにそのあり方を変えながら生き続けてきたように感じます。

四国霊場と遍路が、今後さらにどんな変貌を遂げていくのか。遍路道から外れた、四国の東の片隅から眺めていきたいです。

※幾冊かの書物も参考にしました。が、接待のあり方や、道はずれる遍路たちについては、おもに浅川泰弘『巡礼の文化人類学的研究』（古今書院）によります。